
僕のバイトは探偵です。

山田詩織子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕のバイトは探偵です。

【Zコード】

Z0822Z

【作者名】

山田詩織子

【あらすじ】

探偵のバイトをしている高校生、カルネ。

彼には特別強くもなければ特殊な能力なんてない。

ほんの少しだけ壊れているだけ。

オッドアイの瞳をもつ小学生、シャン。

彼女はバックにナイフを忍ばせ、色違いの瞳で世界を睨み続ける。

平凡でもなければ非凡でもない一人。

犬猫を探したり、落とし物を拾つたり、事件に巻き込まれたり。

そんな話だ。

自ブログ、SSで連載していた小説に加筆、修正したものです。

日曜の朝はいい天気だった。

雨戸を開け、4月の暖かい風を感じながら布団を干そつかと考える。

「たまには干すか」

せっかくの快晴なんだし。
ベランダなんて贅沢なものはないので、落下防止用の柵に布団を引
っ掛ける。
ついでに空気の入れ換えもした。

毎日換気をしたほうがいいらしいのだが、窓を開け放して学
校には怖くて行けない。
いくら僕だってそこまで不用心じゃないのだ。
この部屋にわざわざ盗んでいくようなものはないんだけど。

「んつ」

軽く伸びをする。

いつもより遅く起きて体調も上々。朝飯も上手くできた。
それなりに気分がいい。

こんな日は家に閉じ籠っているより外で何かをしたほうがいい気が
する。

だから、僕の姉さんが勤めている事務所に行こうと思いつ立つた。
だらだらと身支度をしていく。

寝癖と格闘している時、強めに玄関のドアが叩かれた。

「あなたーそこそこのは分かってこぬのよー。」

なんか朝からドアラが始まつてこた。

僕が一体何をしたというんだ。

ビービーもーにナビドアのドアロード展開は苦手。

「あんちやんよお金いい加減返してくれねーか?」

あ、ネタ変えてきた。

そろそろ反応してあげないとかわいそうなので、ドアを開ける。

「おはよー」

「おは…あいたつー」

そこには立つていた少女がアパートのドアに額をぶつけた。ドアも若干いやな軋みをあげる。そこにいたらぶつかるって分かつていなかつたのだろうが、この子。

「それと浮氣と儲金とついで止めよつね」

「近所をのこして尊にならぬか。」

「え、ドアマドヤベツリや?」

額を押さえながらきよとんとした顔をする。

ドア見すぎだよ。教育に悪いよ。

「それよつづいたの?君が僕のところへくるなんて珍しい

シアンちゃんが僕を見上げ、その色違ひの瞳が僕の姿を映した。

「大した理由はない。両親は仕事だし、兄と一人つきりは身の危険を感じてな。あと暇だから」

「マゼンタちゃんとアンジュちゃんはいないの？」

「マゼンタは旅行、アンジュはサッカーの練習試合だ」

納得した。

普段遊んでいる友達も用事でいない。
だが家にいれば兄と一人つきりになる。
だからここへ避難しに来たわけだ。

というか、高校生と一人つきりになるよりも嫌なことなんだな……。

彼女のお兄さんがとんでもないシスコン君なのだが、これについてはまたいつか。

正直なところ、彼は避けたいんだけどな……。変態だし。

「で、いく
ん？」

「いくと呼ぶないくと。

おおかた由来はカルネ＝肉＝にくつて理由なんだろう。

「今日はどこか行く予定だつたのか？」

「うん。事務所に」

「じゃあ私もついていく」

「いいけど、今日も多分暇だよ？」

「それでもいい」

シアンちゃんは仕事の邪魔をしたりしないので、事務所の人達に可愛がられている。

彼女も瞳の色のことで拒絶されないので気に入っているらしい。 探偵事務所に入り浸る高校生と小学生ってどうなんだろ。コナン君はあれ住んでるし。

「ちょっと待つて。荷物取つてくるか」

「うん」

端から見たらなんて思われるんだろうな、なんて思いながら部屋の奥のバックを取りに行つた。

僕の住むアパートから三十分ほど歩くと古めのビルが見えてくる。
その二階が探偵事務所だ。
朝だというのに薄暗い階段を上がり、これまた古ぼけたドアを開けた。

「おはよひびきます」

「おはよ」

三人の視線が僕らに集まつた。

「やあ、おはよう」

この四十代前半ぐらいの男性がこここの所長。
本当の名前は知らないので所長としか呼びよつがない。

「わーいカルネ君だ！」

彼女はポワソン・ペンサーレ。

ブラコン気味の僕の姉。もちろん血は繋がつていて。

「おはよう」一人とも

こちらが姉さんの同僚、ライスさん。

受付・カウンセリング担当のさばさばしたお姉さんだ。

あと一人は…出掛けているのか。

「お久しぶりシアンちゃん。ここに来るなんて珍しいわね

姉さんが少しだけ不思議そうな顔をした。

シアンちゃんが最後にここに顔を出したのは一ヶ月ぐらい前だもんな。

「暇だつたんでな」

「溜まり場かここは…」

ライスさんが小さくツツコミを入れた。
まあ、分からんでもない。

所長が側に置いてあつたファイルから紙を引き出す。

「ちょうど良いところに来たね。仕事があるんだ」

「仕事…入つたんですか？」

「世界でもおわるんじゃないか…」

「それはひどくない！？」

所長がショックを受けていた。

だって、この事務所最高一週間も仕事入らなかつたことがあるし。
仕事に関して姉さん達より遙かに常識人のライスさんが頭を抱えて
いたのを覚えている。

姉さんは『なければないでいいじゃない』とか言つちゃう人だから
な。さぞかしライスさんの頭痛はひどかつたことだらう。

「猫探しをして貰いたいんだ」

「猫ですか」

「なるほど」

手渡された写真には赤い首輪をつけた黒猫が写っていた。

名前はヤマトか。猫は名前呼んでも来ないけど一応覚えておく。
見つかった時に連絡できるよう飼い主の電話番号を携帯に登録した。

「ポワソン君達は」の後浮気調査が入っているからできないんだ」

「えっ、そんなに仕事入りましたか」

「そう。わたしもびっくりした」

「ライス君まで何を言っているんだい！？」

明日は槍が降るかもしねない。

猫探しについては詳しく述べない。

猫がいそつたスポットを順番に見回つて、見つけて、追いかけた。
そして捕まえて引っ搔かれた。

シャーと全身全靈を持つて嫌がられてしまつた。地味にへこんだ。

今はシャンちゃんの腕の中で大人しく抱かれている。

僕が抱っこしようとする、ヤマトはやはり嫌がつて暴れるのでシャンちゃんに彼（ヤマトは男の子）の世話を頼んだ。

…なんなんだわ。そんなに僕がいやなのか。

それともいつかヤマトがテしてくれるとか、そういうの期待しているのかな。

いや、それはないな。

猫のツン^テレつてなんだよ。どんな電波受信したんだよ僕。

「私も猫飼いたかったな」

「コシコシとヤマトの喉を撫でながらシャンちゃんが呟いた。

「飼えないの？」

「お母さんが毛のアレルギー持ちだからな」

「ああ…じゃあ動物全般は無理なんだ」

「でもその他は良いつて言われた

「例えば？」

「「「」」

「まさかの毒蛇…？」

ともあれヤマトを無事発見確保したので、依頼主に電話をかける。

ぶるん、と機械音を聞きながら待つ。

セブンホールで切られた。

ガチャンって。ん、ガチャン？

「…あれ？」

意図的に切られた、みたいだな。

もう一度掛け直して見ると、今度は留守番電話に繋がった。

おかしい。

「どうした？」

「なんというか…当たつて欲しくない予感がビンビン」と

シアンちゃんと田代があつ。

僕は肩を一度竦めて見せた。

「事件発生かも」

「どうするんだ、行く。一度事務所に戻るのか

「いいや 現在進行形で巻き込まれているかもしねれない。だつたら早く助けにいかなくちゃ」

「分かった。場所は？」

「近い。走れば五分ぐらい」

今いる地区と、依頼人のマンションの最短ルートを考える。下手に近道はしないほうがいいか。急がば回れって言つしな。シアンちゃんに付いてくるように言つて走り出す。

「あ、ヤマト」

シアンちゃんの腕からすり抜けてヤマトが僕らの先頭を走り出す。まるで飼い主の危機を察して、僕たちを急き立てるみたいに。

高級マンションの四階。

依頼人は女性。

だからなのか、警備がそれなりに頑丈そうだ。

エレベーターを使い、再びヤマトを抱っこしたシアンちゃんと共に目的の部屋に行く。

名前は…よし、合ってるな。

深呼吸してチャイムを押す。

中から見ていくと、今度は手錠がついたのでインター ホンに向

かつて喋る。

「えっと、『んこちは』

顔の見えない相手に話すのは苦手だ。

「電話したのですが、留守番電話だったので直接来てしました」
違和感。

「…依頼されたヤマトくんを見つけたので、…」

言葉を止めた。

だつて変じやないか。

ここまで相手は一言も発していない。

普通、何か言つはずだろ？

どれだけ非常識な人でも、「あーはいはい」ぐらには言ことやうなものなのに。

喋れないとかは聞いていない。

いや、所長によれば明るい女性だと聞いたのだが。

その『明るい女性』がいつまでも『黙りこぐる』ものなのか？
先ほどの電話の事もあって警戒が高まる。

「あの、あなた…何をしているんですか？」

『…』

ザアアとノイズのみがインターホンから聞こえるだけ。

「…

「……

「ヤア、と焦れるようにヤマトが鳴いた。

瞬間、インターほんの向こう側が騒がしくなり、玄関へ全力で走つてくるような物音がした。

本能が「これはヤバイと警笛した。

「行くよー。」

「お、おうー?」

エレベーターなんて悠長に使つてられない。

非常階段を使いシャンちゃんを先に行かせて掛け降りた。

上から見ている可能性もあるのてしまはく隠れた後に、僕たちはマンションの敷地から抜け出した。

「何がなんだか……。にく、どうしたんだ?」

近くの公園のベンチ。

息を整えながらシャンちゃんが聞いてくる。

「依頼人じゃない誰かが、いたっぽいんだ

「確認はない。

確定できない。

もしかしたら依頼人さんがあんな人なのかもしれないとか、色々あるけど。

だけど、直感的に思ったのだ。

違う。なにか、違う。

「ヤマトの声聞いたとたんに反応したのも気にかかるけどね……」

あれはただ単に条件反射とか、きっかけとか、そんなものかも。まさか誰かさんがヤマトを狙っているとか、そんな展開ないだろ？。しかし、顔をぱっちり見られたわけだから下手に動かないほうがいいかもな。

どうして僕ばかりハンデが溜まつていくのか。

「……む」

「シャンちゃん？」

唸るよつて歯を剥らし、公園の出入口を見るシャンちゃん。つられて見ると、

「……わあ

どう見てもガラの悪いお兄さん達がこつこつに向かって来ていた。……もつちょい、遠くまでいくべきだったな。

僕たちから一メートルほどの距離を置いてお兄さん達は止まった。

「……ベンチに座りたいんですか？ならどうぞ」

「ベンチになんか用はない。その猫を寄越せ」

まさかのヤマト狙いかよ。

「依頼人以外には渡せない決まりになつていまして。すみません

真つ赤な嘘だ。真つ赤な誓いではない。嘘。

決まりとかさっぱり知らないし、分からない。

せいぜい他人の敷地に入らないとかそういうのぐらいだ。

「んだよガキの癖に偉ぶつて。何様のつもりだ？あ？」
「どうやら痛い思いしないと分からぬみたいだな？」

あれれーなんか選択肢ミスつたよー。

しきりがない、シアンちゃんとヤマトだけでも逃がすか。

「こぐ、ヤマトを」

「え？」

ぽんつとヤマトを渡された。

ちよつと引っ搔かれた。どこまで僕が嫌いなんだよお前。

シアンちゃんはショルダーバッグから鞄付きのフルーツナイフを取り出す。

そして、鞄をはらつて抜き身の刃が現れる。

そのままぴたりとお兄さん達にナイフを向けた。

「な……」

お兄さん達がどよめく。

当たり前だ、銃刀法違反してるんだから。じゃなくて。

「そつちが暴力で来るなら、私も武力で行く」
「シアンちゃん……」

彼女は いつもこいつなのだ。

逃げない。

退かない。

強くあり続けようとする。

「シャンちゃん、危ない。逃げよ！」

「追つてくるぞ」

「追つなら逃げ続けよ！」

「……へタレ」

「ひつ。

まあそんなんだけじゃ。

お兄さん達が、ようやく小学生にナイフを向けられたショックから立ち直つてしまつたらしい。

「ちりがわに凶器があるので下手に行動できないみたいだ。

「……けつ」

お兄さん達のリーダーっぽい人が唾をはいた。汚ない。

「猫を寄越せばそれでいいんだよ、グダグダ言いやがつて」

「何故、猫を狙うんですか。関係ありませんよね、あなた達に」

「頼まれてんだよ。無駄話はいい、怪我なんかしたくないならさつ

さとしろ」

「嫌です。なら、その人が来ればいいじゃないですか」

「はあ？ ふざけんじやねーぞ、そつちに刃物があるからつて調子のんな」

調子のれません。

ヤマトの爪が地味に痛い。

「つたく、なんたてめーは。気持ち悪い」

リーダーさんはシャンちゃんを見ながら、吐き捨てた。
彼女は動搖したように切つ先を震わす。

「なんだよその田、色違いで。呪われてんのか？」

余裕が出てきたのか、後ろのお兄さん達もせせら笑う。

「親も大変だなあ、こんな変な子供生んで。ははっ、よく生きてい

こうと思え

「

「謝れよ」

僕としては、ずいぶんと低い声だ。

「謝れ。訂正しろ。彼女は気持ち悪くない」

「……は？ふざけてんのか？」

「ハクロもふざけていない。いいから謝れよ

「ハベ……」

お兄さん達は顔を真っ赤に指をならした。

ああ、マズイかな。

反省も後悔はしていない。

シャンちゃんをなんとか逃せればいいや。自分のことなんていつでもいい。

「謝るのはそっちだろ？散々口けにじやがつ……へぶつ

突然リーダーさんが前のめりに倒れ込んだ。
「ざわ…ざわ…とお兄さん達が驚く。

「そんな年になつてまだ女の子いじめか 将来が不安だ」
「てめつ、よくも！」

リーダーさんを後ろから蹴り倒した男にお兄さんの一人が掴みかかる。

綺麗な一本背負いで放り投げた。

「きつもみ回転式土下座ぐらはしてもらわないとな」

相変わらずのだるそうな顔。

お兄さん達の攻撃を避け、蹴りを叩き込みながら僕らの前に来る。
彼の後ろは死屍累々。

「……なんでここにいるんだよ」

「たまたまだ」

探偵事務所の一員。

僕のちよつと苦手な奴。

シユヴァインだつた。

後日修正&続ける

「で、なんだ？なにが起こった？」

シユヴァインは振り向いて倒れ伏しているお兄さん達を眺める。十人ほど相手にしておきながら息は全く切れていない。

体育の持久走で死にかける僕よりはるかに体力があるんだろうな。

「えっとね」

簡単に説明する。

ふんふんと納得したようにシユヴァインは頷いた。

「なるほど、つまりお前はロリコンなんだな」

「…何を聞いてたんだよお前！」

そんなこと一言たりとも言つていない。

シアンちゃんが呆れたようにため息をついた。

彼女はシユヴァインと初対面の時、さんざんこいつのペースに振り回されていたようだ。

ようだ、というのは僕はその時氣絶していたから。死にかけていたともいづ。

「しかし……その猫が狙われてるのか」

「ああ。どうすればいいんだ？」

シアンちゃんが困ったように首を傾げる。つられてツインテールが小さく揺れた。

女の子らしい仕草で可憐らしい。

「まずそのナイフをしまえ

「あ、忘れてた」

「…忘れるものなの？」

「埒があかねーし、ちょっと詳しく聞くか

「え?」

スタスターとお兄さん達の所に歩いていくショヴァイン。僕、シャンちゃん、ヤマトでなんだなんだと見守る。彼は屈んで、丁度顔を上げかけたリーダーさんの顔を掴みもう一度地面とじつつんこさせた。

痛そう。

「……」

そのまま無言で腰に手をやり、すらりと細身のナイフを取り出した。そう、ここいつもナイフをもつているのだ。

一本のみのシャンちゃんと違い、おそらくは何十本も。

シャンちゃんとショヴァインで銃刀法違反コンビと名付けてもいい気がする。

しかし半年前、その違反コンビに助けられたのだから強くは言えない。

「で、だ。お嬢ちゃんへの悪口をまず謝りつか」

「な、なんでそんなこと」

ナイフが閃いて、リーダーさんの顔のすぐ横に突き刺さった。

いつさいがつさい容赦ない。

「ま、私情なんだけどな。俺は人を見た目で判断する奴が嫌いなんだ」

「……そうなのか?」

「……そうでもないよ」

「そこ黙つてろ」

聞こえてたか。

「人の外見に触れるのはあまりよろしくないんだが、知らないか?」

「知らないし興味も」

「やつが、残念だ」

シユウア インは地面に突き刺さったナイフを抜いた。

「お嬢ちゃんがいるから過激なことはできないが……ひよつと、外見変えてみるか？」

恐ろしい悪魔の言葉だった。

「皮膚を少しずつ剥ぐとか、鼻とか耳削ぐとか。安心しりょく、死にはしない」

その間僕はシャンちゃんの耳をしつかりガードしていた。

教育に悪いだろうが馬鹿。

昼からこんなことするよつた非常識なやつじやないからただの脅しだろう。

なんかシャンちゃんが照れていた。

「嘘だろオイ…そんなことしたことあんのかよ」

「本当だ。あと悪いが、今あげたこと」

シユウア インはふと表情に陰りをみせた。

「 何度か経験、あるからな」

どちらなのは、知らない。

それは詮索しないほうがいいのだろう。

「やられたくないならお嬢ちゃんに今すぐ謝つて、あと誰に頼まれたのかと言え」

「ひいっ…す、すいませんでしたーー。」

土下座のような形で叫んだ。

一時的にシャンちゃんの耳を解放する。

「あ、ああ……」

ドン引きしていた。

無理もない。

「指図したのは誰だ？」

「しらねえ！」

「ふーん」

「待て！これには長い話があつて！」

「長い話嫌いなんだよ。要点だけまとめ
サドつぱりがすごい。」

：御愁傷様だ。同情はしないが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0822z/>

僕のバイトは探偵です。

2011年12月5日22時47分発行